学位論文題名

the Taming of the Devil: A Study in the Various Aspects of
Miltonic Satan Represented in the Heroes of the Novels Written
by Women Writers from late 18th century to 20th century

(日本語訳：悪魔馴らし：18世紀末から20世紀の
女性作家の小説のヒーローにおけるミルトンの悪魔の諸相の研究)

学位論文内容の要旨

本論文は、18世紀後半から20世紀の女性作家の作品(ロマンス)の中核にある、ヒロインとペアとなる男性ヒーローの中に反映されているミルトンの悪魔の伝統を検証することによって、これらの作品、及び、こうした作品を愛読する女性読者たちの心理の地図を明らかにすることを、目的としている。

第1章 「炎のような、刺し貫く」目は、ロマン派女性作家(ラドクリフとブロンテ姉妹)のヒーローに受け継がれた、ミルトンの悪魔を識別する徴である。ミルトンの『失樂園』における悪魔は、「本来の輝きのすべてを失ったわけではない破滅した天使」であり、その墮天にも関わらず、力と美、男性的魅力を十分に備えた「父」である。反逆者であるミルトンの悪魔はロマン派男性作家にとってもアイドルだったが、女性作家たちは、彼の「父」としての属性と「恋人(誘惑者)」としての属性を強調した形で自分たちの作品のヒーローを造形し、次代へと受けついでいった。悪魔の変貌は次のような過程を経ている。即ち、ラドクリフの作品において、悪魔は、「悪役」として人間化されたものの、あくまでも最終的には排除される敵役に留まり、ヒロインの父親的恋人としての役割を全うする立場は与えられなかった。バイロンにおいて、ミルトンの悪魔は主人公の座とヒロインの恋人の立場を与えられた。バイロンにおいては、ミルトンの悪魔は常に悲劇的最期を遂げるべく定められた存在であったが、主人公でありヒロインの恋人であるという立場におかれたことが、次代の女性作家たちの作品において大団円を可能にしていくことになった。ロマンスのヒーローとしてのミルトンの悪魔は、シャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』のヒーローであるロチェスターにおいて完成を見た。ロチェスターの中のロマン派的悪魔は、ロマン派的悪魔として受けついできた魅力とヒロインにとって父親代理の役割を果たす擬似近親相姦的恋人としての特徴の双方を兼ね備えたヒーローとして、20世紀の女性作家の作品に現れるヒーローたちの原型となっている。この悪魔の変貌の過程は同時に悪魔を「飼いならす」過程でもあった。ミルトンの悪魔は、その過度に暴力的な性質を削がれ、ヒロインにとって都合の良い、ヒロインの手に余らないような存在に、女性作家たちの手によって変えられていったのである。

第2章 ブロンテ姉妹の小説の子孫である現代の女性作家のロマンス作品には、無数のサタンの末裔たちがヒーローとして活躍している。その「輝く、炎のような、刺し貫く」目を筆頭に、これらのヒーローは、ミルトンのサタンからブロンテ姉妹のヒーローたちへと受けつがれた特徴を備えている。これら20世紀のロマンスにおいて、ヒーローたちは、魅力的でハンサムな悪魔として、ヒロインと擬似近親相姦的關係を結ぶ父親的恋人として、獣性・暴力性が内在する悪役的人物として、複合的な特徴を共有している。悪魔としてのヒーローは、ヒロインを魅了する常ならぬ者として、ロマンスを女性のファンタジーならしめている。父親的恋人としてのヒーローは、「子供のように無条件に父に愛される」というヒロインの、ひいては女性作家・読者の欲求を満たす者である。悪役的人物としてのヒーローは、ヒロインが克服すべき障害として物語を成立せしめる一方で、屈強で優秀な男と規定されているヒーローに打ち勝つことにより、女性の力を強める働きをしている。ヒロインとヒーローを同等の立場に置くために象徴的去勢やヒーローの死を必要とした19世紀の作品と比べ、20世紀の作品に必要なのはヒーローが女性的力の前に屈服することだけであり、これは少なからず女性作家及び読者の意識の変化や実際に彼女らの有する社会的な力の変化を反映しているものと思われる。

第3章 18世紀後半から20世紀後半へと変貌したミルトンのサタンとしてのロマンスヒーローの持つ特徴——炎の目、父親代理、悪魔性——の背後には、女性作家・読者にとって、それらの特徴をヒーローに寄与しなければならない、絶対的な理由がある。ロチェスターの象徴的去勢に表されているように、また、フロイト、ラカンが説くように、目は性的欲望の「代理」であり、ミルトンのサタンの目の炎は欲望の炎である。ヒーローの「刺し貫く (piercing, penetrating)」、「硬い目 (hard-eyed)」は、ミルトンのサタンの男性的力と魅力の証として、常に受けつがれ続け、ロマンスヒーローのトレードマークとなったのである。ロマンスヒーローがヒロインの父親代理の役目を与えられているのは、父親に絶対的の権利を与え、父娘近親相姦を容易なものとする近代西欧社会のシステムを反映している。『失樂園』において、「右」にある者である息子とは対極の「左」にあるものとして規定された娘にとって、父親の愛情を求めるのは、狂気とも言える強迫観念なのである。ロマンスにおいて、ヒーローは父の愛を求める女性作家・読者のファンタジーを叶えるため、父親代理としての性格を強く担うことになる。その一方で、「母親不在」により無力化した娘に力を与えるべく、しばしば母親代理となる女性キャラクターが登場する。ヒーローの悪魔性はミルトンのサタンを始祖とする伝統から来ているが、その一方で、女性と悪魔の、「劣った存在」としての共通項もまた、ヒーローを悪魔、すなわち女性の仲間とする要因のひとつとなっている。また、悪魔と神は分裂した一対の父親像であり、息子を愛する神に対して、娘を愛する悪魔は、娘すなわち女性作家・読者にとって拠所となりえる存在である。これらの要素が複雑に絡み合った結果、ロマンスヒーローはヒロインを誘惑し、性的に脅かす悪魔であり、同時にヒロインを守り愛する父親的恋人なのである。

第4章 女の性は猶太・基督教的家父長制社会において、悪と見なされ、断罪されてきた。妊娠・出産とそれに伴う危険は女の性に対する神の罰であると、『聖書』と『失樂園』は説いている。18世紀、19世紀の女性作家は、この女の性を呪う「父」の声の前に、沈黙するか、躊躇いがちに囁くに留まった。ブロンテの『ジェーン・エア』の大団円を成立させる長男の誕生は父の声への妥協の産物である。20世紀の女性作家の作品において、妊娠と出産は本質的に女性にとって良きものとして賞賛され、神話化された。しかし、ロ

マンスヒロインたちは、結末の大団円を成立させるために、ジェーン・エアに倣って、男児を出産し、息子を求める「父」に妥協しつづけている。女の性に対する女性作家・読者たち自身の態度は比較的保守的で、曖昧であり、女の性を「邪悪」と断じた「父」の声を退けることができずにいるのが現状である。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 長 尾 輝 彦

副 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 助 教 授 瀬 名 波 栄 潤

学 位 論 文 題 名

the Taming of the Devil: A Study in the Various Aspects of
Miltonic Satan Represented in the Heroes of the Novels Written
by Women Writers from late 18th century to 20th century

(日本語訳：悪魔馴らし：18世紀末から20世紀の
女性作家の小説のヒーローにおけるミルトンの悪魔の諸相の研究)

審査担当者は、まず本論文の観点と手法に注目した。本論文が、英文学の古典中の古典である、ミルトンの『失樂園』を完全にマスターし、その上で、ミルトンの描いたサタンの系譜を18世紀、19世紀、さらには20世紀の、主として女流作家の作品の中に跡づけて、「ロマン派以降の女性作家の作品におけるミルトンのサタンの伝統の継承と発展の研究」を目指すものであり、豊富な古典の知識を基礎においた重厚かつスケールの大きい論文であると判断した。古典の研究であると同時に現代文学の研究でもあるという二面性を持っており、そのいわば新旧の両極を、サタン像の継承という観点によって、結びつけていること、そして、方法論的にも、純文学的な考察から、社会学的・心理学的な考察を加味した議論へという、幅の広さも発揮している点に注目した。

審査担当者は、ついで、本論文の議論の展開の明晰さに注目した。本論文はA4版タイプ印字で600ページ近い、膨大な論文である。それにもかかわらず、全体の構成と議論の展開はきわめて明晰である。その第1章において、『失樂園』に描かれたサタン像を明らかにしたうえで、十八世紀末の女流作家ラドクリフの小説の悪役の男性の中に類似を見いだす。さらにバイロンの諸作品に登場する悪魔的主人公、オースティンの小説、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』、ブロンテ姉妹の小説といった、イギリス文学の古典的作品群の中にサタン像の継承をたどっている。第2章は、一転して、二十世紀後半の10人の女性作家たちの空想的な小説を取り上げ（作品数は50に及ぶ）、『失樂園』を源流としブロンテ姉妹によって定着したサタンの登場人物がそこに受け継がれている様子を明らかにしている。第3章と第4章は、第1章と第2章で跡づけたこの系譜に対して、筆者が行った解釈を展開している。すなわち、第3章では、『失樂園』のサタンが、女性作家および女性読者の願望によって、意識的あるいは無意識的に変容されつつ受け継がれたこと、第4章では、このサタンの男性像とかかわる形で登場する、女性主人公の心

理を取り上げ、そのような人物を描いた女性作家およびそれを受容する女性読者の心理が、論じられている。

審査担当者は最後に、当該研究領域における本論文の研究成果について、判定を行った。18、19世紀の女性作家たちの小説に登場する男性人物たちの源流に、『失樂園』のサタンがあるということは、すでに指摘されてきたことであるが、しかしこの問題をこれほどまでに徹底的に洗い直し、さらにそれを現代の氾濫する出版文化にまでたどったのは、他に例を見ない。扱った作品は、古典的作品については、8の作家の14の作品、さらにこれらの作品には膨大な研究書が出版されており、その中の重要なものが本論文において、ほぼ網羅されている。また現代の氾濫する女性作家たちの作品については、10の作家の50の作品が取り上げられて論じられている。もちろんこれを本格的なミルトン研究として、また19世紀女性作家論として、あるいは現代の女性問題の議論として、それぞれ別個に見るならば、不十分な点がないわけではない。しかしながら、その一つだけでも学位論文を形成するに十分と思われるテーマを三つも取り上げて、しかもそれを系統づけたという点は、驚くべき快挙であり、力作であることは明らかであると判定した。英文学研究の中の、ミルトン研究、バイロン研究、ブロンテ姉妹研究、現代女性問題研究、といった複数の研究領域に、大きな刺激を与えるであろう論文であると判定した。

審査担当者は、学位申請者に対する口述試験を含め、前後6回に及ぶ審査委員会をもち、入念な審査を重ねた。口述試験に臨んだ学位申請者の受け答えは、博識に支えられ、自信に満ちた堂々としたものであった。これらの審査の末に、審査担当者は、本論文が、長年にわたる研鑽と熟慮の成果を、壮大なスケールで展開したものであり、学位授与の基準を十分満たす研究成果であるという点で、意見の一致を得て、その旨の審査報告を教授会に対して行った。